

# 夜明け

キリストの臨在の使徒



# 『ドーンマガジン』

2026年4月

## 目次

<b>特集記事</b> .....	2
死からの命 .....	2
<b>聖書研究</b> .....	16
復活の希望 .....	16
カエサルのはカエサルに、神のものは神に .....	19
子どものようになれ.....	22
家族を教える.....	25
<b>キリスト者の生活と教理</b> .....	28
弟子としての生き方の現れ.....	28

聖書と一緒に読み進めよう！

## 死からの命

「まず第一に、私が受けたことを、あなたがたに伝えました。すなわち、キリストは聖書の言葉どおり、私たちの罪のために死なれ、葬られ、聖書の言葉どおり、三日目に復活されたのです。」  
コリント人への手紙第一 15:3,4

聖書は最初から最後まで、他のどこにも見られない教義を掲げています。それは、死者のための来世が復活によってもたらされるというものです。神に靈感を受けたすべての著者は、救い主への確信を表明しました。彼らはさらに、「朝」に、神が墓から人類を呼び起こすとき、人々は立ち上がり、悪しき者たちはもはや地上で支配権を握ることはないと言いました。詩編の作者はこう告げています。「彼らは羊のように墓に横たわり、死が彼らを食い尽くす。しかし、朝になれば、正しい者が彼らを支配する。」（詩編49:14）。その「朝」は、義人に支配権をもたらすだけでなく、すべての人を墓の力から解放つのです。預言者たちも死者の復活を教え、新約聖書の著者たちは、来世と祝福へのすべての希望をそれに基づいていました。使徒パウロはこう記しています。「もし死者がよみがえらないなら、キリストもよみがえらなかつたことになります。もしキリストがよみがえらなかつたなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたはなお罪の中にあることになります。また、キリストにあって眠りについた者

「私たち滅びてしまったことになります。」（コリントの信徒への手紙一 15:16-18）

## 主の復活

パウロは、イエスが死からよみがえったことに関する神の力について、次のように語りました。「その力強い働きに従って、私たち信じる者に対して示された、神の に満ちた偉大な力とは、どのようなものでしょうか。それは、神がキリストを死からよみがえらせ、天の御座の右に置かれたときに、キリストのうちに働かせた力です。」（エペソ人への手紙 1:19,20）。イエスご自身も、弟子たちに自らの死とそれに続く復活を予告し、「わたしはエルサレムに行かなければならない。そこで、長老たちや祭司長たちや律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目に復活する」と語られました。マタイによる福音書 16:21

イエス・キリストの復活は、単なる死の眠りからの目覚め以上のものだった。それは、全宇宙における生命の最高次元、すなわち神性への高揚であった。イエスの復活後の地位は、次のように述べられている。「すべての支配、権威、力、権勢、また、この世にあるもの、また来るべき世にあるもの、あらゆる名にまさる者。また、神はすべてのものをその足の下に服従させ、教会に対して、すべてのものの頭として彼を授けられた。教会は彼の体であり、すべてに満ちる方の満ち溢れである。」 「また、彼はからだ、すなわち教会の頭です。彼は初めの者、死者の中から最初に生まれた方であり、すべてのものにおいて、彼が第一となるためです。」エペソ人への手紙 1:21-23 ; コロサイ人への手紙 1:18

このような力強い御業に伴う力を私たちが完全に理解することはできないが、イエスを死からよみがえらせたのと同じ力が、私たちが困窮するあらゆる時に助けてくださるといふ聖書の多くの約束を、私たちは喜び、また喜ぶべきである。この神の力は、イエスと共に犠牲を捧げる者として、私たちが命を捧げることに忠実である度合いに応じて、私たちに与えられている。パウロが次のように語ったとき、彼が指し示しているのはまさにこの重要な考えである。「いや、むしろ、私は、私の主キリスト・イエスを知る知識の卓越性のために、すべてのものを損失と見なします。私はキリストを得るために、すべてのものを損失と見なし、それらを糞土と見なしています。」（ピリピ人への手紙 3:8）。そして彼は次のように付け加えています。「すなわち、キリスト（イエス）を知り、その復活の力を知り、その苦難の交わりを知り、その死に似た者となるためです。もし可能ならば、死者の復活に至りたいと願うからです。」ピリピ人への手紙 3:10,11

もし私たちが日々、生ける供え物として自分自身を神にささげるなら、神の力強い御力は、私たちが命を捧げるために必要な力を与えてくださいます（ローマ人への手紙12章1節）。主は、御自分の民に御心を行わせるために、その力を使って強制されることはありません。もし彼らが犠牲を払う意志を示すなら、主は、御心に適う者となるための精錬の働きに伴う試練に耐え抜くための機会と、必要な力を与えてくださいます。使徒ペテロはこの件に関して、正しい思考の流れを次のように述べています。「それゆえ、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。そうすれば、時が来れば、神はあなたがたを高くして

くださいます。あなたがたの思い煩いをすべて神に委ねなさい。神はあなたがたを顧みておられるからです。」（ペテロの手紙一 5:6,7）

## パウロの説教

パウロは、コリントの兄弟たちへの手紙であるコリント人への第一の手紙15章12節から28節において、復活に関する完全な論説を私たちに与えています。第一に、彼は復活への信仰がキリスト教の教義の一部であることを証明しています。これなしには、キリスト教信仰の全体構造は無価値なものとなってしまいます。（コリントの信徒への手紙一 15:12-19）。第二に、教義を証明した上で、彼は、私たちの主の復活こそが、キリストが死んでくださった全人類に対する復活の神の保証であることを示しています。（コリントの信徒への手紙一 15:20）。彼はさらに、「人が死をもたらしたように、人が死者の復活ももたらしたのです」と言って、この事実とその合理性を証明しています。（コリント人への手紙第一 15:21）。人であるアダムによって全人類に死がもたらされたように、人であるキリスト・イエスによって、復活の祝福がすべての人に与えられるのです。

完全な復活という祝福が全人類に与えられているとはいえ、キリストの真理と義の王国の統治下で提供される永遠のいのちの祝福を、すべての人が得られるわけではないという点に留意することが重要です。永遠のいのちは、王国の義の条件の下で自らのふさわしさを証明するために、試練と試みの期間を無事に乗り越えた者たちだけに与えられるものです。キリストに信仰と信頼を置き、キリストのような心

の品性を育む者は皆、「生かされる」ことになる。彼らは永遠の人間としての命を受ける。これこそが、使徒の言葉「アダムにおいてすべての人が死ぬのと同様に、キリストにおいてすべての人が生かされる」（コリント人への手紙第一 15:22）。死からの目覚め後、人格と神の律法への従順に関する試練を無事に乗り越えたすべての者は、この約束の完全な恵みを受けることになる。

## 卓越するもの

先に引用したように、パウロはイエスの復活の力を知るために「すべてのものを損失と見なした」と記しています。彼は間違いなく、イエスと共に犠牲として命を捧げる民が利用できる天の父の力、そして「最初の復活」において教会のために神がその力をさらに用いることを念頭に置いていたのでしょうか。  
黙示録20:6

健康、安楽、名声、あるいはこの世の喜びといった現在のあらゆる利点は、靈的な栄光と比べれば何の意味も持ちません。私たちは、パウロがそうしたように、そのような高き榮譽（ ）へと召されたすべての人々に約束されていることを考えるとき、他のすべてのものを取るに足りないものと見なすべきです。しかし、そのような榮譽は、私たちが今、キリストの苦難に与っている場合にのみ、私たちのものとなります。使徒が言ったように、「私にとって益であったものは、キリストのために損失と見なしました。」（ピリピ人への手紙 3:7）。もし忠実であれば、私たちは、最初の復活において私たちを死からよみがえらせ、キリストと共に御自身の右の座に高めてくださる神の力強い御業を体験することになるで

しょう。（黙示録 3:21）。このように、忠実な教会の将来の相続分は、栄光、すなわち「はるかに優れた栄光」となるのです。コリント人への手紙第二 3:10

## 軽い苦難

この主題について、パウロは次のように語っている。「私たちの軽い苦難は、ほんの一時のものですが、私たちのために、はるかに重く、永遠に続く栄光をもたらします。私たちは、見えるものを見ず、見えないものを見るからです。見えるものは一時的ですが、見えないものは永遠なのです。」（コリント人への手紙第二 4:17,18）。ここで使徒は、キリスト・イエスにあるこの天の召しを理解し、その価値を深く知る者は、神に自らを完全に委ねた者だけであることを示しています。イエスが私たちに与えてくださるものについて、パウロはさらに次のように述べています。「神は、この方を、その血による信仰を通して、贖いの供え物として立てられました。それは、神の寛容によって、過去の罪が赦されるという、神の義を明らかにするためです。すなわち、今この時に、神の義を明らかにするためです。それは、神が義であり、イエスを信じる者を義と認める方であるためです。」ローマ人への手紙3:25,26

使徒パウロは、復活に関して従うべき順序があることを示しています。「すべての人」に「生かされる」機会が与えられると述べた後、彼は次のように述べています。「しかし、人はそれぞれ自分の順序に従って、キリストが初穂として。」（コリント人への第一の手紙15:23）。初穂の階級、すなわちキリストの象徴的な体の忠実な成員たちは、順序において

も位においても最優先となる。(コリント人への第一の手紙 12:12,27)。もし彼らが、この現世において犠牲を払うことによってキリストと結びつくことに忠実であれば、彼らは「初穂」の階級の一員となる。「あなたがたは知らないのですか。私たちのうち、イエス・キリストにバプテスマを受けた者は皆、キリストの死にバプテスマを受けたのです。ですから、私たちはバプテスマによって、キリストの死と共に葬られたのです。それは、父の栄光によってキリストが死者の中からよみがえられたように、私たちもまた、新しいのちを歩むためです。もしあなたがたが、キリストの死に似た姿に植え付けられたのなら、キリストの復活に似た姿にもなるのです。」ローマ人への手紙 6:3-5

「初穂の群れ」となるよう招かれたのは、教会の頭である主イエスが死からよみがえられた数世紀前のことでした。まことに、主は「最初」であり、初穂の中で最も高い位におられます。それ以来、信者たちの「小さな群れ」が、信仰によって、贖い主の犠牲にあずかってきました。彼らは自らを主に奉獻し、キリストと共に相続人となりました。パウロは彼らについて次のように記しています。「もし子であるなら、相続人でもあります。神の相続人であり、キリストと共に相続人となるのです。もし、キリストと共に苦難を受けるなら、共に栄光を受けることになるのです。」「あなたがたがキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」ローマ人への手紙8章17節、ガラテヤ人への手紙3章29節

## 神に慰められて

初穂のクラスに属しようと努める人々は、神の多くの尊い約束によって、この行動へと導かれています。「もし私たちがキリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることも信じるのです。キリストが死人の中からよみがえった以上、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配することはないからです。」（ローマ人への手紙 6:8,9）。これは、天の父の偉大な力のさらなる例です。私たちの主イエスの復活に関するこの力は、敵のあらゆるな攻撃から私たちを守ってくれます。それは恐れを勇気に変え、疲れ果てた者に新たな力を与えてくれます。しかし同時に、神の力は、私たちを必要な試練や経験から隔離したり、義のために苦しむことから免れさせたりするものではありません。（ペテロの手紙一 4:12-16）。むしろ、それは私たちが主に待ち望み、忍耐強く最後まで耐え忍ぶ助けとなります。マタイによる福音書 24:13

これこそ、愛する主イエスの足跡を歩み続けたいと願う、すべての神の民にとっての祝福された希望であり、相続財産です。彼らは「約束の聖霊」によって封印されており、この聖霊は神の御言葉と摂理によって、彼らが「愛する方の中に受け入れられている」ことを証ししています。（エペソ人への手紙 1:13,6）。これらの約束を大切にしましょう。「神の御霊に導かれる者は、みな神の子です。あなたがたは、再び恐れに陥る奴隷の霊を受けたのではなく、養子としての霊を受けたのです。それによって、私たちは『アバ、父よ』と叫ぶのです。御霊ご自身が、私たちの霊と共に、私たちが神の子であることを

証ししてくださる。」「愛する者たちよ、今、私たちは神の子です。私たちが将来どのような者になるかは、まだ明らかになっていません。しかし、主が現れるとき、私たちは主のようになることを知っています。なぜなら、私たちは主がどのような方であるかを見るからです。」ローマ人への手紙**8:14-16**；ヨハネの手紙第一**3:2**

初穂であるキリストのクラス、すなわち頭とからだの死からの復活は、死者の復活によって人類に与えられる未来のいのちという約束が成就する最初の段階に過ぎない。神の約束とは、「義人も不義人も、死者の復活がある」ということである。（使徒行伝**24:15**）。キリストは、すべての人々に義と真理と愛を教えるために、「あらゆる支配、権威、力を打ち倒す」であろう。「なぜなら、キリストは、すべての敵を御足の下に置かれるまで、支配し続けなければならないからである。最後に滅ぼされる敵は死である。」コリント人への第一の手紙**15:24-26**

## 再び立ち上がる——回復

聖書において、「復活」という言葉は新約聖書にのみ見られます。これはギリシャ語の「アナスタシス（anastasis）」の訳語であり、「再び立ち上がる」、「回復」、「よみがえる」という意味を持ちます。死から奇跡的に蘇ったものの、その後再び死んでしまった人々の一時的な蘇生を指す際には、他のギリシャ語が用いられます。ラザロの復活やその他の事例がこれに該当し、そこではギリシャ語の「アナスタシス」も、その英語訳である「復活」も使用されていません。ヨハネによる福音書**12章1節**を参照してください。

私たちの主が与えてくださった「すべての人のための身代金」は、すべての人にとって完全な復活〔アナスタシス〕の機会を確かなものとしたのです（テモテへの手紙第一2章5、6節）。復活を、再び死ぬだけの短い命への目覚めを意味するものに限定することは、神の力と人類に対する神の計画を制限することになります。この言葉の真の意味には、失われたすべてのものの完全な回復という考えが含まれています。人類は人間の完全性を失い、道徳的墮落、病氣、悲しみ、そして最終的には死へと至る下降の螺旋をたどってきました。私たちの主イエスは、失われたすべてを取り戻すために死なれました。したがって、復活の約束とは、失われたものが贖われ、回復されるという約束なのです。ルカ19:10

回復や立ち上がりを目指す「アナスタシス」という言葉の真の力を理解するためには、人間がいかに深く墮落したかを思い起こさなければなりません。贖い主によって人類のために確約された完全な回復とは、失われたすべてのものの完全かつ徹底的な回復となるでしょう。確かに、命は失われましたが、それに伴い、精神的、道徳的、そして肉体的なあらゆる墮落もまた失われ、最終的には完全な崩壊、すなわち死に至りました。世界の救い主である主イエスの自発的な犠牲とその後の復活によって、メシアの王国において、キリストの階級（頭と体）による義の統治の下、人類の家族のうち、進んで従順な者たちは皆、完全なる高みへと、また神の御姿と似姿へと引き上げられる完全な「（復活）」を享受することになる。

## 完全性への回帰

キリストの千年の王国は、人類にとっての復活の日となるであろう（黙示録 20:4,6）。しかし、人類は、キリストにおいてすべての人に与えられている、その偉大な精神的・道徳的完全性を、強制的に達成させられるわけではない。死者が墓からよみがえったとき、彼らは自らの完全な復活に関わる事柄に協力し、参加しなければならない。墓の中では、これを行う機会はなかった。聖書が告げているように、「あなたの手が何をするにせよ、力を尽くして行いなさい。あなたが向かう墓には、仕事も、計画も、知識も、知恵もないからである」「死にはあなたのことを覚える者はいない。墓の中で、だれがあなたに感謝をささげるだろうか？」（伝道の書9:10；詩篇6:5）

ヨハネによる福音書5章28、29節にはこう記されています。「時が来れば、墓の中にいる者たちはみな、その方（イエス）の声を聞いて出て来る。善を行った者はいのちの復活へ、悪を行った者はさばきの復活へと。」墓にあるすべての者が死者の復活において目覚めるといふ、なんと祝福に満ちた確証でしょうか。目覚める者は二つのグループに分かれ、それぞれ異なる状況下にあります。すでに指摘したように、死に至るまで忠実であった完全に奉獻された者たちは、死から抜け出し、完全な天のいのちへと至ります。彼らは神の性質を受け継ぎ、もはや死はその性質に対していかなる力も支配力も及ぼすことはできません。黙示録2:10；ペテロの手紙第二1:4

残りの人類は、裁き、すなわち試練の期間へと目覚めさせられる。その間、彼らは罪と死から完全に立

ち上がり、回復する機会を与えられる。彼らは、その千年の裁きの日の指示に従わなければならない。彼らは、頭であり体であるキリストの導きを通して、天の父について学ぶための最良の条件を与えられる。預言者はこう記している。「荒野と荒れ地は彼らのために喜び、砂漠は喜び、バラのように花開く。……その時、盲人の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開かれる。……そこに大路があり、道があり、それは『聖なる道』と呼ばれる。……主の贖われた者たちは、歌と永遠の喜びを頭に載せて、シオンに帰ってくる。彼らは喜びと歓喜を得、悲しみと嘆きは逃げ去る。」イザヤ書35章1節、5節、8節、10節

この素晴らしい聖書の箇所は、神が意図された完全な姿へと、この地がどのように導かれるかを明らかにしています。地は再び、人類にとって喜びに満ちた住まい、美しい楽園となるでしょう。メシアの王国は、人類を救い上げるだけでなく、この地に完全なる祝福をもたらすのです。神はご自身の計画に必要なすべてを予見しておられ、ご自身が創造された人類のあらゆる必要に十分備えてくださいます。神は、人類をサタンの力とその人を盲目にさせる影響から救い出すと約束されました。黙示録20:1-3

キリストの王国の祝福は、最終的に、物理的にも象徴的にも、盲人の目を開かせるでしょう。あらゆる無知、偏見、迷信は取り除かれます。すべての人が、神の御性質と属性、とりわけ神の愛に関する真理を正確に知るようになるでしょう。その結果、主に対する真の知識が、「海を覆う水のように」全地を満たすことになるのです。（イザヤ書11:9）。人々

の肉体だけでなく、その心と精神も同様に、罪の束縛から解放される。これこそが、メシアの王国の目標であり、偉大な業である。王国が確立されれば、平和、喜び、そして命の祝福がすべての人々に流れ始めるだろう。神が全世界のための計画をお持ちであり、その中には、人類を神の愛から引き離してきたあらゆるものの終焉が含まれていることを、私たちは喜びます。「もはや、隣人に『主を知れ』と教えることも、兄弟に『主を知れ』と教えることもない。なぜなら、小さい者から大きい者まで、すべての者がわたしを知るからである。」ヘブル人への手紙 8:11

啓示者ヨハネは、幻の中でこれらの状況を見て、こう言いました。「私は、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は過ぎ去り、海ももうなかった。また、わたしヨハネは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられ、神のもとから天より下ってくるのを見た。そして、天から大きな声が聞こえて言った。『見よ、神の幕屋が人々と共にある。神は彼らと住まわれ、彼らは神の民となり、神ご自身が彼らと共におられ、彼らの神となられる。神は彼らの目からすべての涙をぬぐい去られる。もはや死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。以前のものはすべて過ぎ去ったからである。御座に着いておられる方が言われた。「見よ、わたしはすべてのものを新しくする。」そして、私に言われた。「書き記せ。これらの言葉は真実で、確かなものである。」ヨハネの黙示録 21:1-5

人類は再び地を治め、永遠に平和と喜びのうちに生きることができるようになる。すべての人は、イエ

スの言葉に基づく教訓を完全に学ぶことになる。イエスはこう言われた。「『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛せよ。……あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』」マルコによる福音書 12:30,31

愛こそが、人類が学び、実践しなければならない最も重要な恵みです。「愛は神の律法の全き成就」です。（ローマ人への手紙13:10）完全な地上で永遠に生きようと願う者は皆、この愛に到達しなければならない。神の律法が命の条件として掲げるこの品性の証し、すなわち完全な愛である。最終的に、この律法は、永遠の命を得るすべての神の知性ある被造物を支配しなければならない。人が神の御姿に完全に回復されたとき、すべての人が神、神の愛する御子、そして全人類の兄弟愛を愛するようになる。

ラザロが亡くなった時、イエスは悲しみに暮れる妹マルタを慰めようとされた。「イエスは彼女に言われた、『あなたの兄弟はよみがえる』。マルタは言った、『私は、最後の日の復活の時に、彼がよみがえることを知っています』。イエスは彼女に言われた、『わたしはよみがえりであり、いのちである。わたしを信じる者は、死んでも生きる。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがない』。」（ヨハネによる福音書 11:23-26）。私たちは、この心からの言葉が、全地のすべての人々において完全に成就するその日を、期待に胸を膨らませて待ち望んでいます。

4月5日のレッスン

## 復活の希望

鍵となる聖句：「キリストは死者の中からよみがえり、眠りについた人々の初穂となられた。」  
コリント人への手紙第一 15:20

選読箇所：  
コリント人への手紙第一 15:12-28

「初穂」があるなら、「その後の実」も必ずあるはずです。その論理は明白です。復活に関する使徒パウロの論証は力強く、私たちのキリスト教信仰の確固たる神学的基盤を成しています。

キリストは死者の中からよみがえられました——それは比喩的な意味ではありません。文字通り、死者の中からよみがえられたのです。キリストご自身がこう証言されました。「わたしは、かつて死んだが、今や生きている者である。見よ、わたしは永遠に生きている。」（黙示録1:18）。キリストが生きておられるゆえに、死後の命に対する私たちの希望は、はかないものではなく、現実的なものです。私たちがアダムにおいて皆死ぬのと同じように、キリストにおいて皆が生かされることは確実です。「アダムにおいて皆死ぬのと同じように、キリストにおいて皆が生かされるのです。」 1コリント15:22

コリント人へのパウロのメッセージは、この主題に関する彼の以前の教えと一貫していた。アテネのアレオパゴスで、彼は聖書に記録されている最も印象

的な説教の一つを行った。復活について、パウロは神が「ご自身が定めた人によって、義をもって世界を裁く日を定められた」と宣言した。「神は、その方を死者の中からよみがえらせたことによって、すべての人にこのことを保証された。」 人々は死者の復活について聞くと、ある者は嘲り、ある者は「この件については、また後で聞かせてほしい」と言った。（使徒**17:31,32**）。イエスの復活は、すべての人に永遠の命を得る機会が与えられるという確信を与えてくれる。神は「私たちの罪のために引き渡され、私たちの義認のために復活された、私たちの主イエスを、死者の中からよみがえらせた。」（ローマ人への手紙 **4:24,25**）。イエスが死からよみがえられたことは、私たちの義認の根拠です。それは死後の命に対する私たちの希望の礎なのです。

不思議なことに、コリントの教会の一部の兄弟たちは、とんでもない主張をしていた。「もしキリストが死からよみがえったと宣べ伝えられているのに、どうしてあなたがたの中には、死者の復活などないと言う者たちがいるのですか。」（コリント人への第一の手紙 **15:12**）。どうしてクリスチャンが復活の教理を否定することができたのでしょうか。彼らは無知だったのでしょうか。私たちはそうは思いません。コリントの復活否定派は、おそらくキリスト教に改宗した、高学歴のサドカイ派の人々だったのです。彼らの宗派には、復活などないという特異な考えがあったのです！

パウロは、ユダヤ人からの迫害に対して身を守る際、この事実を巧みに利用した。「パウロは、ある者はサドカイ派、ある者はパリサイ派であることを悟

ると、公会堂で叫んで言った。『兄弟たちよ、私はパリサイ人であり、パリサイ人の子です。死者の復活と希望について、私は裁かれています！』彼がこう言ったとき、パリサイ人とサドカイ人の間に論争が起こり、集会は分裂した。サドカイ人は、復活も天使も霊も存在しないと主張するが、パリサイ人はその両方を認めているからである。」使徒行伝 23:6-8

使徒行伝の記録によれば、「神の言葉は広まり、エルサレムでは弟子たちの数が大いに増え、多くの祭司たち [その大半はサドカイ派であった——使徒行伝 5:17参照]が信仰に従った。」（使徒行伝6:7）。サドカイ派の誤解に対抗するには、パウロの力強い論証が不可欠であった。キリストの贖いの業と復活の希望について、より明確な理解が与えられたことを神に感謝する。

## カエサルのもものはカエサルに、 神のもものは神に

鍵となる聖句：「イエスは答えて言われた。『カエサルのもものはカエサルに返し、神のもものは神に返しなさい。』すると、人々はイエスを不思議に思った。」

マルコによる福音書12章17節

選読箇所：

マルコによる福音書12章13-17節

私たちもまた、イエスの知恵と教えに感嘆します。この鍵となる聖句は、多くのキリスト教国で日常語の一部となっています。イエスがこの言葉を語ってから二千年が経った今も、それは偉大な真理として私たちの心に響き続けています。

この「鍵となる聖句」の文脈において、互いに憎み合っていたパリサイ人とヘロデ党の人々が、主を陥れるために手を組んでいる様子が見て取れます。彼らの言葉は偽善に満ちていました。「そこで、彼らはパリサイ人とヘロデ党の人々を何人か主のもとに遣わし、その言葉によって主を陥れようとした。彼らは来て、主に向かって言った。『先生、私たちはあなたが真実な方であり、誰の意見も気にされないことを知っています。あなたは人の外見に惑わされることなく、まことに神の道を教えておられるからです。カイザルに税を納めることは、律法にかなっているのでしょうか。納めるべきでしょうか、それと

も納めるべきではないでしょうか」(マルコ 12:13,14)。彼らの言葉は偽善的であり、その心深くに根ざしたものでした。彼らは、イエスが「まことに神の道を教えておられる」などとは、一瞬たりとも信じていなかったのです。彼らの邪悪な動機を見抜いたイエスは、こう答えられた。「偽善者たちよ、なぜわたしを試みるのか。税金用の硬貨を見せてみよ。」そこで、彼らはデナリウス銀貨をイエスに差し出した。(マタイ 22:18,19)。パリサイ人とヘロデ党員がデナリウス銀貨を差し出したという事実は、彼らの欺瞞をさらに裏付ける証拠であった。

ユダヤのシェケルは、神殿の奉仕のための献金用貨幣であった。デナリウスはローマの貨幣である。ローマへの税はデナリウスで支払われた。イエスを中傷する者たちは、その貨幣を財布に入れており、シェケルではなくそれを差し出したことで、彼ら自身がカエサルへの貢ぎ物を支払うことが合法であると信じていたことを示した。したがって、彼らの主張は偽りであった。

イエスはその硬貨を手に取り、皆に見えるように掲げられた。そして、「これは誰の肖像と銘文か」と尋ねられた。彼らは、「カイザルのものです」と答えた。イエスは答えて言われた。「カイザルのものはカイザルに返し、神のものは神に返しなさい。」すると、人々はイエスを不思議に思った。(マルコ 12:16,17)。マタイの福音書には、その後、彼らが「イエスを離れて去って行った」と付け加えられている(マタイ 22:22)。彼らは自らの仕掛けた罠に嵌まり、その策略は失敗に終わり、後世への教訓として記録されたのである。

今日の混乱した世界において、クリスチャンである私たちは、信仰の実践に関して対立を招くような問いに直面している。対立する思想は、聖書を用いて自らの立場を補強しようと試みる。様々な方向に引き裂かれそうになっても、キリストとその教えこそが私たちの錨であり続ける。まず、私たちの創造主である神に仕えよう。神を愛し、隣人を愛するという、イエスの単純明快な教えに従おう。 敵さえも愛しましょう！イエスはこう言われました。「あなたがたに聞く者たちに言います。敵を愛し、あなたがたを憎む者に善を行い、あなたがたをののしる者を祝福し、あなたがたを悪用する者のために祈りなさい。あなたの片方の頬を打つ者には、もう片方の頬も向けなさい。また、あなたの上着を奪う者には、下着も拒んではならない。」（ルカ6:27-29）

「黄金律」は、私たちの日々の歩みの道に輝かしい光を照らしています。「あなたがたも、人々にしてもらいたいように、人々にもそのようにしなさい」（ルカ6:31）。「 」と、法によって定められたものは「カエサル」に返し、私たちのすべてを神に捧げましょう。

## 子どものようになれ

鍵となる聖句：「まことに、あなたがたに告げます。幼子のようにならなければ、だれも神の国に入ることはできません。」

マルコによる福音書 10:15

選読箇所：

マルコによる福音書 10章13-16節

イエスの弟子たちが、幼子たちに主の祝福を求めた人々を叱りつけるなどというのは、彼らの性格からは考えられないことのように思えます。おそらく、長い一日の教えや、パリサイ人との対立、あるいは離婚に関するデリケートな議論が、彼らの反応を引き起こしたのでしょう。彼らは、幼子たちがそのような大人向けの話題に触れるのを防ごうとしたのかもしれない。あるいは、彼らは御国における自分たちの将来の役割に気を取られていたのかもしれない。誰がイエスの右に座り、誰が左に座るのか？ 幼子たちに気を散らされている場合ではなかったのだ。それどころか、イエスは弟子たちのその態度に不快感を示された。彼らは御国とその序列に関する重要な点を見落としていたのだ。

イエスは不快感を示し、こう命じられました。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国は、このような者たちのものである。まことに、あなたがたに告げる。子供のように神の国を受け入れない者は、決してそこに入ることはできない。そして、イエスは子供たちを抱き上げ

、手を置いて祝福された。」（マルコ10:14-16）。イエスが「神の国はこのような者たちのものである」と述べたとき、幼子たちに体現されているとは、一体どういう意味だったのでしょうか。

彼らはイエスの腕に抱かれるほど小さかった。イエスも幼い頃、似たような経験をしていた。「見よ、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は義人であり、敬虔な人で、イスラエルの慰め主を待ち望んでおり、聖霊が彼の上に臨んでいた。そして、聖霊によって、主のキリストを見るまでは死なないことが彼に啓示されていた。そこで、彼は聖霊に導かれて神殿に入った。両親が幼子イエスを連れて来て、律法の定めどおりに行おうとしたとき、シメオンはイエスを抱き上げ、神を賛美して言った。『主よ、今こそ、御言葉どおり、あなたのしもべを安らかに去らせてください。私の目は、あなたがすべての民の目の前で備えてくださった救い、異邦人に啓示をもたらす光、そしてあなたの民イスラエルの栄光を見たからです。』」ルカによる福音書 2:25-32

イエスに祝福されたこのような幼子たちは、心と思いに無垢さを持っていた。皮肉、偏見、人種差別、ナショナリズム、貪欲、憎しみ、そして墮落した人間が持つその他の欠点から解放された彼らは、神の御国において支配するであろう心の清さ、愛、そして信頼を体現していた。

イザヤが預言した平和の王国は、「子供のよう」な心が果たす積極的な役割を示しています。「狼は子羊と共に住み、ヒョウは子山羊と共に伏し、子牛と若い獅子と肥えた家畜は共にいる。そして、幼子が彼らを導く。雌牛と熊は共に草を食み、その子らは

共に伏し、獅子は牛のようにわらを食べる。乳飲み子はコブラの穴のそばで遊び、乳離れした子はマムシの巣に手を入れる。わたしの聖なる山では、誰も傷つけたり滅ぼしたりすることはない。なぜなら、水が海を覆うように、主の知識が全地を満たすからである（ ）」（イザヤ書11:6-9）。「幼子のように」あれ。神の国は、そのような者たちのものだからである。

## 家族を教える

主要な聖句：「今日、わたしがあなたに命じるこれらの言葉を、あなたの心に留めなさい。あなたの子供たちに熱心に教え、家に座っているとき、道を歩いているとき、横になっているとき、起き上がるとき、いつでもそれらについて語りなさい。」

申命記 6:6,7

選読箇所：

申命記 6:3-9

私たちの「主要な聖句」は、この目まぐるしい現代社会を予見していました。私たちの世界は、絶え間なく、かつてないほどの気晴らしに満ちています。携帯電話はその影響力の下で私たちを囚人としています。何時間も画面をめくり、メッセージを送り、そして「重要な」情報を検索することは、すべて霊的な混乱を招く要因となっています。2024年の世界保健機関（WHO）の報告書によると、

- 青少年の11%がソーシャルメディアの「問題行動」の兆候を示しており、2018年の7%から増加している。特に女子の影響が大きく、13%であるのに対し、男子は9%にとどまる。
- 問題のある利用は、精神的・社会的幸福度の低下、薬物使用の増加、睡眠障害と関連しており、これらはいずれも不安やうつ病への脆弱性を高めます。

臨床医らは、エンゲージメントを最大化するように設計されたアルゴリズムが、まだ発達途上にある青

少年の自己制御システムに過度の負荷をかけ、強迫的な利用、他者との比較による不安、そしてネットいじめのリスクを高めると強調している。

どこへ行っても、自動車を運転している最中でさえ、大人がスマートフォンに没頭している姿が見られます。幼い子供たちでさえ、ショッピングカートやレストランのハイチェアに座り、デジタルメディアによる娯楽に親しんでいます。私たちは、デジタル世界から離れることが、幸福感と内なる平安を育むと信じています。

私たちは、今日の技術の驚異の利用を否定するわけではありません。しかし、それに対抗する癒しの薬となるものを提唱しています。それは聖書において「隠れた所」とされ、私たちがそこに入り、神の言葉が与える平安、静けさ、そして知恵を享受できる場所です。「いと高き方の隠れた所に住む者は、全能者の陰に宿る。……彼は私の隠れ場、私の要塞。私の神、私は彼に信頼を置く。」（詩篇91:1,2）。では、どうすればその隠れ場へたどり着けるのでしょうか？さらに重要なのは、今日の学びにおいて、どうすれば子供たちをそこへ導けるかということです。

今日の鍵となる聖句は、家庭に敬虔な雰囲気築くよう賢明に助言しています。家族で聖書を読むことは、人生に深く健全な影響を与えます。それは、まず家長が神の御言葉を心に大切にすることから始まります。そして、その心から、日々、神の律法的美徳について語りましょう。詩人の言葉を考えてみましょう。「主の律法は完全で、魂を生き返らせ、主の証しは真実で、愚かな者を賢くし、主の定めは正

しく、心を喜ばせ、主の戒めは清く、目を照らし、主を畏れることは清く、永遠に続く。主の裁きはすべて真実で、正しく、金よりも望ましい。...さらに、それらによってあなたのしもべは戒められ、それらを守ることに大きな報いがある。」詩篇19:7-11

この詩篇のメッセージの力を悟るなら、偉大なる創造主の知識に満ちた家庭（ ）以外のものを、どうして提唱できようか。使徒パウロは素晴らしい霊的な父であった。彼は愛を込めてこう記している。「あなたがたには、キリストにある教師が万人もいたとしても、父は多くない。なぜなら、キリスト・イエスにおいて、私は福音によってあなたがたを産んだからである。」（コリント人への手紙第一 4:15）。「父たちよ、あなたがたの子供たちを怒らせないでください。彼らが落胆することのないように。」（コロサイ人への手紙 3:21）。あらゆる機会に、子供たちを神の御言葉へと導き、その御言葉を通して歩ませるための恵みと知恵が、私たちに与えられますように。

## 弟子としての生き方の現れ

「あなたがたの信仰による働き、愛による労苦、そして私たちの主イエス・キリストへの希望による忍耐を、神であり私たちの父である御方の御前で、絶えず思い起こしています。」

テサロニケ人への第一の手紙 1:3

キリストの弟子とは、イエスを自分の救い主として受け入れた人々のことです。さらに、彼らは、十字架を背負い、死に至るまでイエスの足跡に従うという招きを受け入れることによって、イエスに代表される神の大義に自分の人生を捧げています。（マタイによる福音書 16:24）。「弟子」という言葉は「学び手、または生徒」を意味し、キリストの弟子たちは、自分たちの師として受け入れたイエスから教えを受けます。イエスの教えは、天の父の御心を反映したものです。

イエスはナタナエルについて、「見よ、まことのイスラエル人だ。彼には偽りが無い。」（ヨハネ1:47）と言われました。これは、イエスの時代には、イスラエル人として見なされていたが、実際にはそうではなかった人々、すなわち、その生活がイスラエルの神の御心に十分に調和していなかった人々がいたことを示唆しています。そのため、彼らはイエスを約束されたメシアとして受け入れませんでした。これは、キリストの弟子たちによって構成される現在の霊的イスラエルについても同様です。「真の」弟子たちがいる一方で、イエスの追従者であると公

言しながらも、主の教えに従わないため、名ばかりの弟子である者たちもいます。

心の誠実さは、真の弟子となるための基本的な資質の一つです。誠実な者は、単なる言葉だけでなく、行いによっても自らの信仰を現そうと努めるでしょう。使徒ヨハネはこう記しています。「子供たちよ、言葉や口先だけで愛し合うのではなく、行いと真実をもって愛し合いましょう。それによって、私たちは真理に属していることを知り、御前で心を確信することができるのです。」（ヨハネの手紙一 3:18,19）

冒頭の聖句が宛てられているテサロニケの兄弟たちは、明らかに「行いにおいても真実においても」非常に忠実であり、弟子としての信仰の真摯さを示していました。パウロは、彼らの信仰による働き、愛による労苦、そして希望による忍耐を称賛しました。キリストの真の弟子である者は皆、山をも動かすような信仰を持ち、愛に満ち、主と真理と兄弟たちへの奉仕において忍耐強く、辛抱強くなければなりません。

## 信仰の働き

パウロは、テサロニケの兄弟たちの「信仰の働き」を称賛しました。これは非常にふさわしい表現です。なぜなら、真の信仰があるところには、必然的にそれに伴う行いが伴うからです。ヤコブは、「信仰に働きが伴わなければ、その信仰は、それだけでは死んでいるのです。「ある人は言うかもしれない。『あなたには信仰があり、私には行いがある。行いのないあなたの信仰を見せてくれ。そうすれば、私

は自分の行いによって、私の信仰を見せてあげよう』と。」（ヤコブ2:17,18）。ヤコブが用いた例えは、貧しい兄弟姉妹が私たちの交わりにやって来るといふケースでした。（ヤコブ2:15,16）。もしその人を無視するなら、それは真の信仰から生じるべき行いの欠如を露呈することになります。

信仰が働く方法は数多くあります。パウロはヘブル人への手紙の中で、その多くに言及しています。この記述の一部を引用すると、次のようにあります。「信仰によって、アベルはカインよりも優れた供え物を神にささげました。...信仰によって、ノアは、まだ見ぬことについて神から警告を受け、恐れを抱き、家族を救うために箱舟を造りました。... 信仰によって、アブラハムは、後に相続として受け継ぐべき地へ出よと召されたとき、従った。.....また信仰によって、サラ自身も子を宿す力を与えられ、年老いてから子を産んだ。.....信仰によって、アブラハムは試みられたとき、イサクをささげた。.....信仰によって、ヤコブは死ぬとき、ヨセフの二人の息子を祝福した。..... 信仰によって、ヨセフは死ぬ時、イスラエルの子らの脱出について語り、自分の遺骨について命じました。.....信仰によって、モーセは成長して、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、一時的な罪の快樂を楽しむよりも、むしろ神の民と共に苦難を受けることを選びました。」ヘブル人への手紙 11:4-25

これらは、パウロが旧約聖書の多くの登場人物の生涯から読み取った信仰の現れの一部に過ぎない。そして彼はこう付け加える。「さらに何を語ろうか。ゲデオン、バラク、サムソン、エフタのことは言う

までもなく、ダビデ、サムエル、そして預言者たちのことを語り尽くすには、時間が足りない。彼らは信仰によって、国々を征服し、義を行い、約束を受け、獅子の口を封じ、火の勢いを消し、剣の刃を免れ、弱さから強さへと変えられ、戦いに勇猛となり、異邦人の軍勢を退けた。また、女たちは死んだ者を受け取り、よみがえらせた。」ヘブル人への手紙 **11:32-35**

ここでパウロは、主が信仰ある者たちを喜ばれたことを示す形で報いられた事例における、信仰による働きについて言及している。そして彼は次のように続ける。「またある人々は、残酷な嘲笑や 鞭打ち、さらには鎖につながれ、投獄される試練に遭った。彼らは石打ちにされ、のこぎりで引き裂かれ、試みられ、剣で殺された。彼らは羊の皮や山羊の皮を身にまとい、放浪し、貧しく、苦しめられ、苦しめられた。（彼らは、この世にふさわしくない人々であった。）彼らは荒野や山々、また地の洞窟や穴の中で放浪した。」ヘブル人への手紙 **11:36-38**

ここに示されているように、多くの人々が試練と迫害を経験しました。それは、彼らが信仰によって主の大義のために立ち、周囲を取り巻く悪の勢力と妥協しなかったからです。その好例が、ネブカドネザルの命令によって建てられた像にひれ伏すことを拒んだダニエルの三人の友人の事例です。この像を礼拝することを拒んだ者は、燃え盛る炉に投げ込まれ、滅ぼされることになっていました。（ダニエル書 **3:1-12**）。二度目の機会を与えられ、ネブカドネツアル王からの警告を受けた後、これらの忠実な勇士たちはこう言いました。「もしそうであるなら、私たちが仕える神は、燃え盛る火の炉から私たちを救い

出されるでしょう。そして、王よ、神は私たちがあなたの手から救い出されるでしょう。しかし、もしそうでないとしても、王よ、あなたがたに知っておいていただきたい。私たちはあなたの神々を仕えることも、あなたが立てた金の像を礼拝することも決してしない。」ダニエル書3:17,18

ここでの信仰の働きとは、ネブカドネザルが立てた金の像を礼拝することを拒んだことでした。この三人のヘブル人は、自分たちの神が、燃え盛る炉での残酷な死から彼らを救い出すことができると信じる信仰を持っていました。一方で、彼らが死の運命にあるかどうかは、彼らには分かりませんでした。しかし、結果がどうであれ、信仰は彼らに誘惑に対する勝利をもたらしました。彼らは、もし死んだとしても、それは彼らの神が、この が最善であると見なされたからだと信じる信仰を持っていたのです。彼らの真の希望は、「より良い復活」における救いでした。ヘブル人への手紙 11:35

## 愛の労苦

愛が働く方法は数多くあります。パウロはヘブルの兄弟たちに対し、次のように書きました。「神は、あなたがたが聖徒たちに仕え、今も仕えていること、すなわち、御名のために示した愛の働きと労苦を、忘れられるような不義な方ではありません。」（ヘブル人への手紙 6:10）。ここで言及されている「愛の労苦」とは、兄弟たちのために行われるものです。これは、主が私たちが愛してくださったように、私たちも互いに愛し合うべきだという主の教えと一致しています。私たちに対する主の愛は、私たちのために命を捧げるように主を動かしました。した

がって、ヨハネは戒めの中で、私たちが愛に満たされるべきだと記しています。「私たちは兄弟たちのために命を捨てるべきです。」（ヨハネの手紙第一 3:16）

愛の働きは自発的なものです。人は愛によって促されることはあっても、強制されることはありません。愛は利他心に基づいており、神に由来するものです。神の中に、私たちは愛の最高の模範を見出します。神のすべての創造の業は、ある意味において神の愛の証しです。神はご自身が創造されたものを必要としていませんでした。それらは、神の被造物の益となるためのものでした。神の愛の最も傑出した現れは、世の贖い主であり救い主となるために、御独り子をお与えになったことにある。「神は、その独り子をお与えになるほどに、この世を愛された。それは、御子を信じる者が一人として滅びることなく、永遠の命を得るためである。」ヨハネ3:16

新約聖書には、ギリシャ語の「アガペー」（愛を意味する）が「チャリティ（慈善）」と訳されている箇所がいくつかあります。聖書を学ぶ人々の多くは「チャリティ」よりも「愛」という訳語を好みますが、純粋な「チャリティ」という概念こそが、聖書が示す神の愛の意味により近いものなのです。慈善とは、見返りを期待することなど到底できない人々に対して与える行為です。これは、神が御子を賜ったことにも当てはまります。この賜物を受け入れる際、私たちにはそれを報いる術など何一つないということを理解して受け入れるのです。私たちにできることは、その賜物を受け入れ、それを与えてくだ

さった方に心を尽くして人生を捧げることで、感謝の意を表すことだけです。

愛は労苦し、愛は与える。それゆえ、愛は主、真理、そして兄弟たちへの奉仕の中に現れる——すべて「見返りを求めず」に。愛が心を満たすところには、愛の労苦がある。他者、とりわけ兄弟姉妹のために、日々の犠牲が払われるでしょう。主に仕え、主の栄光を現すための燃えるような熱意が生まれるでしょう。そのような現れがないとき、それは単に愛が欠けていることを意味します。ヨハネが問うたように、そのような者の中に「神の愛はどのように宿っている」のでしょうか。1ヨハネ3:17

パウロは、主の弟子たちの心と生活の中にあってはならない、他の愛の働きについても言及しています。「愛は寛容であり、親切であり、……嫉妬せず、……自慢せず、高ぶらず、礼儀をわきまえており、自分の利益を求めず、怒らず、悪を思わない。不義を喜ばず、真理を喜ぶ。すべてに耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない。」（コリント人への第一の手紙13章4-8節）。墮落した肉体の私たちに、これらの様々な資質に完全にかなうほど愛に満たされることが期待できるわけではありません。しかし、そうしたいという心の願いがあるならば、それらは互いの交わりの中で、また世の中で出会う人々に対して、大きく現れてくるでしょう。

## 忍耐をもって希望を抱く

パウロはまた、テサロニケの兄弟たちの「主イエス・キリストに対する希望の忍耐」を称賛しています

。別の箇所では、彼はこう記しています。「私たちは希望によって救われています。しかし、見える希望は希望ではありません。なぜなら、人が見ているものを、なぜなおも望むでしょうか。」（ローマ人への手紙 8:24）。キリストの弟子として、私たちは主が約束されたこと、すなわちまだ目に見えないことを望んでいるのです。初代教会において、これらの中で最も重要なものは、キリストの御国が築かれることでした。彼らは、その御国でキリストと共に生き、支配することを望んでいたのです（黙示録 20:6）。私たちはその時がますます近づいていることを知り、喜びますが、キリストと共に生き、支配するという希望の成就を、今も待ち望んでいます。私たちは、初代教会の弟子たちと同様に、今もなお「希望に満ちた忍耐」を必要としているのです。

この待ち望みには忍耐と根気が必要です。なぜなら、待ち望む間には耐えなければならない試練があるからです。パウロはまたこう記しています。「私たちは、苦難の中でも誇りとしています。苦難は忍耐を生み、忍耐は経験を生み、経験は希望を生むからです。そして、希望は私たちを恥じさせません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」ローマ人への手紙5章3-5節

ヘブル人への手紙には、キリストの約束された再臨について記されており、それは弟子たちの忍耐の必要性和直接結びついています。「あなたがたには忍耐が必要です。神の御心を行なった後、約束を受け取るためです。あと少しの間、来るべき方は来られ、遅れることはありません。義人は信仰によって生

きる。しかし、もし誰かが後退するなら、わたしの魂はその人を喜ばない。」（ヘブル人への手紙 10:36-38）。使徒ヤコブの手紙には、次のように記されています。「それゆえ、兄弟たちよ、主の来臨（ギリシャ語：臨在）まで忍耐しなさい。見よ、農夫は地の貴重な実りを待ち望み、そのために長い間忍耐し、初雨と遅雨を受けるまで待ち続けるのである。あなたがたも忍耐し、心を堅く保ちなさい。主の来臨[臨在]が近づいているからである。」ヤコブ 5:7,8

主の摂理において、主はしばしば、ご自身の計画の成就における展開が、実際にはそうではなかったにもかかわらず、人々の目にはもっと目前にあるかのように思わせることがありました。これは、キリストの再臨と御国の確立に関して特に当てはまります。初代教会の弟子たちの多くは、キリストの再臨がすぐそこにあると信じていました。しかし、ペテロや他の者たちは、自分の生涯を終える前に、それが自分たちの時代には起こらないことを見抜くことができました。とはいえ、神の計画におけるこの画期的な出来事が実現するまでに、これほど多くの世紀が経過することになると、誰一人として気づいていたかどうかは疑わしいことです。

それでもなお、この栄光に満ちた希望は極めて尊いものであったため、彼らは忍耐と根気をもって、その実現を日々待ち望んでいた。テサロニケの兄弟たちも同様であり、本節のパウロの観察から判断するに、彼らは主の奉仕に引き続き積極的に従事することで、適切な方法で希望が成就するのを辛抱強く待ち望んでいた。彼らは積極的に待ち望んでいたのです。

## メッセージを宣べ伝える

今日の聖句において、使徒パウロがテサロニケの兄弟たちの「信仰による働き」を称賛した際、彼が指していたのは、キリストの福音を宣べ伝える彼らの活動でした。これは、使徒の言葉の文脈から明らかになります。続く節にはこう記されています。「私たちの福音は、言葉だけによってあなたがたに伝えられたのではなく、力と聖霊と、そして確信をもって伝えられたのです。あなたがたも知っているとおりに、私たちはあなたがたのために、あなたがたの間でどのような者であったか。そして、あなたがたは、多くの苦難の中にあっても、聖霊の喜びをもって御言葉を受け入れ、私たちや主イエス・キリスト（ ）の模範に従う者となりました。それゆえ、あなたがたはマケドニアとアカイアにいるすべての信者たちの模範となったのです。「あなたがたから、主の御言葉がマケドニアやアカイアだけでなく、あらゆる場所に響き渡り、あなたがたの神に対する信仰が広く知れ渡ったため、私たちが何も語る必要はありません。」 テサロニケ人への第一の手紙 1:5-8

ここでパウロは、テサロニケで弟子となった人々に対して、どのように福音を証したかについて語っています。彼の熱意と忠実さは、彼らに明らかに示されていました。彼は、自分自身がキリストに従ったように、彼らもまた自分の後を追う者となり、福音を宣べ伝えるという宣教の熱意を模範として示したと述べています。このため、彼らもまた「マケドニアとアカイアにいるすべての信者」にとつての模範となったのです。そして、その理由を次のように説明しています。「あなたがたから、主の御言葉が

マケドニアやアカイアだけでなく、至る所に響き渡り、あなたがたの神に対する信仰が広まったからです。」これらは驚くべき言葉です！

私たちが弟子であると公言する主であり師であるイエスは、私たちが全地において彼の証人となるべきだという指示を残されました（マタイ28:19、使徒1:8）。もし私たちが彼と彼の導きを信じるなら、その指示に従うはずです。心から従わないことは、信仰の欠如の証拠となるでしょう。なぜなら、この信仰による働きが私たちの日常生活から欠落してしまうからです。むしろ、主の御言葉を広く遠くに響き渡らせたテサロニケの兄弟たちのようでありましょう。こうして彼らは、パウロが示した模範に従うことにおいて、自らの忠実さを証明したのです。彼らは、パウロがイエスに従ったように彼に従いました。イエスご自身もまた、御国の福音を宣べ伝えることに忠実であられたのです。マタイ4:17；ルカ4:43

## 今日における同じ試練

現代の私たちは、神の計画の成就に関して、初代教会の信徒たちよりもはるかに多くの知識を持っています。それにもかかわらず、辛抱強く耐え忍ぶという試練は、私たちにも課せられています。私たちは皆、御国の希望が速やかに実現することを願っていますが、それがいつになるかについては確証がありません。パウロの時代の兄弟たちと同様に、私たちもまた、いつまでこのように仕え、犠牲を払い、苦しみ続けることになるのかを知ることなく、主に仕えるために命を捧げ続けるよう命じられています。

だからこそ、私たちは希望に満ちた忍耐を必要としているのです。待ち時間がどれほど長くとも、また、待ち続ける間、主の奉仕においてどれほど厳しい経験に直面しようとも、希望を持ち続けることができるのは、この忍耐があるからです。これはまさに忍耐の試練です。希望の実りが遅れているように見えるというだけの理由で、真理とその奉仕に対する当初の熱意を失ってはなりません。神は完璧な時を司る方であり、神の計画のあらゆる細部は、神が定められたまさにその時に実現しつつあります。もし私たちにとってその御計画が遅れているように思えるとしても、実際にはそうではないことを悟りましょう。（ハバクク2:3、ヘブル10:37）。むしろ、主は私たちの希望に満ちた忍耐を試しておられ、待ち時間がどれほど長く感じられようとも、私たちがどれほど熱心に主に仕え続けるかを見守っておられるのです。

パウロがヘブルの兄弟たちに、神は彼らの愛の労苦を忘れるほど不義な方ではないと確信させた際、彼はこう付け加えました。「私たちは、あなたがた一人ひとりが、希望を最後まで確信し、同じ熱心さを示すことを願っています。」（ヘブル人への手紙6:10,11）。信仰による働き、愛による労苦、そして希望による忍耐が、たとえ短期間であれ長年にわたって続いたとしても、それだけでは不十分です。真の弟子としての試練とは、狭い道の終わりまで、死に至るまで忠実であり続けることです。「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。」ヨハネの黙示録 2:10

イエスは種を蒔く人のたとえを説明して、こう言われた。「このたとえの意味はこうだ。種は神の言葉である。道端に落ちた種は、御言葉を聞く者たちである。しかし、悪魔が来て、彼らが信じて救われることのないように、彼らの心から御言葉を奪い去る。岩の上に落ちた種は、御言葉を聞いて喜びをもって受け入れる者たちである。しかし、彼らには根がなく、しばらくは信じるが、試練の時には離れてしまう。また、いばらの中に落ちた種は、聞いた後、出て行って、この世の心配や富や快樂にふさがれ、実を結ばない人々である。しかし、良い土に落ちた種は、誠実で良い心を持って御言葉を聞き、それを守り、忍耐をもって実を結ぶ人々である。」ルカによる福音書8章11-15節

いばらの中に落ちた種は、主のすべての弟子たちに対する特別な警告を含んでいます。私たちは、この世の心配事が、信仰による働きや愛による労苦を不当に妨げることのないよう、警戒しなければなりません。「善を行うことに忍耐強く励むこと」こそが、この危険に対する最良の防護策であり、また、私たちの歩みが終わるまで労苦を続けるための尽きることのない力を祈り求めることも同様です。ローマ人への手紙 2:7

最後に、主の財産を忠実に用いた僕について、タラントのたとえ話には次のように記されています。「主人は彼に言った。『よくやった、良い忠実な僕よ。わずかなことに忠実であったから、多くのことを任せるつもりだ。主人の喜びにあずかれ。』」（マタイによる福音書25章21節）。私たち一人ひとりが、この地上の旅路の終わりまで、「神であり、私た

ちの父である御方の御前で」、信仰の働き、愛の労苦、そして希望の忍耐を忠実に続けていきますように。